

『教訓近道』の疑問表現

——『伊曾保物語』との比較を通して——

濱千代 いづみ

1 はじめに

本研究の目的は、疑問表現の形式と用法が、時を隔てて共通の話材に用いられる場合にどのように変化するか、あるいは対応しているかについて、イソップ寓話集を用いて明らかにすることである。イソップ寓話集は明治時代に渡部温が翻訳した『通俗伊蘇普物語』が普及し、小学校の修身や唱歌、国語読本などの教科書の素材として用いられた。^(註1)しかし、それ以前、江戸時代にもイソップ寓話は読みつがれてきた。代表的なものに、イエズス会の宣教師たちがもたらしたイソップ寓話集を翻訳し、江戸時代前期に公刊された『伊曾保物語』と、江戸時代後期にイソップ寓話を抄出して作成された『教訓近道』がある。本稿では『教訓近道』を中心にして、『伊曾保物語』を比較の対象に据え、調査をする。

『教訓近道』は天保十五年（1844）に刊行された教訓話の合巻である。その作者は初代の為永春水、画工は歌川貞重である。為永春水は万治二年（1659）整版本『伊曾保物語』を所持していたと見られ、イソップ寓話16話を取り上げ、さらに中国古典から3話を採集している。イソップ寓話の持つ面白さと教訓性に着目して刊行したのであろう。中国古典からも採集し、キリシタン文学との関わりを知られないように心配りしている。

まず、『教訓近道』の疑問表現の形式を整理し、古活字本『伊曾保物語』の疑問表現と比較する。古活字本『伊曾保物語』の疑問表現については既に疑問詞疑問文・肯否疑問文の形式に分けて調査し、考察してある。^(註2)この作品の成立は寛永十六年（1639）の刊記のものが伝わっているので、その時期を下らない。それより約二百年後に『伊曾保物語』に基づく抄本ともいえる『教訓近道』が成立した。これによって、江戸時代前期上方語と江戸時代後期江戸語の疑問表現の形式と用法の異同を明らかにできると考える。次に、『教訓近道』の疑問表現を、為永春水が所持していたと見られる万治二年整版本『伊曾保物語』の対応する部分と比較する。これによって、為永春水の『教訓近道』編集の態度を究明していく。

以下、『教訓近道』は〈教訓〉、古活字本『伊曾保物語』は〈伊曾保〉、万治二年整版

本『伊曾保物語』は〈万治本〉〈万治〉の略称を用いる。^(註3)また、引用に際し、適宜送り仮名を付し、踊り字をかなに直すなどの手を加える。

2 『教訓近道』の疑問表現の概観

〈教訓〉の19話には27例の疑問表現が見られる。その中には会話文の1例で、〈万治本〉の対応部分と比べると疑問詞の脱落が考えられるものがある。

(1) 〈教訓〉蟬答へて、「さらば、今とても歌ひ給はぬぞ。(195-11)

〈万治〉蟬申しけるは、「今とても、などうたひ給はぬぞ。(129-11)

また、寓話の後に内容に即した教訓が続く構成になっているが、その教訓のさらに後に、書き手から読み手に対して問いかけるものがある。

(2) 〈教訓〉なんと、子供衆。合点か合点か。(210-3)

これらを除き、25例を整理の対象にする。

〈教訓〉の19話のうち、〈万治本〉と話材が共通する16話に22例の疑問表現が見られる。その内訳は、会話文に20例、地の文に1例、心内文に1例である。中国古典に由来する3話に3例の疑問表現があり、その内訳は、会話文に2例、地の文に1例である。これらを形式に従って整理し、分類すると次の表ようになる。括弧内の数値は中国種3話の用例数を表している。

表1 〈教訓〉の疑問表現の形式

疑問表現	形式	会話文	地の文	心内文	計
疑問詞 疑問文	(A) WH—	6			16 (2)
	(B) WH+カー	1		1	
	(C) WH—ゾ	3 (1)			
	(E) WH—ヤ	4 (1)			
	(J) —WH+ゾ	1			
肯否 疑問文	I —や—連体形		1		9 (1)
	II —終止形+や	2			
	III —連体形/名詞句+か	5	1 (1)		
計		22 (2)	2 (1)	1	25 (3)

- ・疑問詞疑問文は疑問詞（を含む成分）を符号WH、助詞を片仮名で示す。
- ・「—連体形/名詞句+か」形式を「一か」と表すこともある。

- ・(A)～(J)、I～Ⅲは表2・表3の〈伊曾保〉の分類・形式に対応している。

表1から次の事が指摘できる。

- 疑問詞疑問文の方が肯否疑問文よりも多く、全体の三分の二に相当する。
- 疑問詞疑問文で多い形式は、(A)の疑問詞(を含む成分)を用い、文末を連体形で結ぶ形式である。
- 肯否疑問文で多い形式は、Ⅲの文末助詞形式「一か」である。

3 古活字本『伊曾保物語』の疑問表現との比較

古活字本『伊曾保物語』の疑問表現には、古代語の基本形式のほかにさまざまな形式が存在する。そこで、実態に合わせて整理し、文中の助詞の有無・文末の形式に従い、表2・表3のように分類した。

表2 〈伊曾保〉の疑問詞疑問文の形式

分類	形式	会話文		地の文		心内文		計
		問い	反語	疑い	反語	疑い	反語	
(A)	WH—	3	3	0	1	0	0	7
(B)	WH+カー	6	10	5	7	1	3	32
(C)	WH—ゾ	22	1	0	0	0	0	23
(D)	WH+カーゾ	14	0	0	0	0	0	14
(E)	WH—ヤ	4	3	0	0	0	1	8
(F)	WH+カーヤ	6	8	0	1	0	0	15
(G)	WH—ゾヤ	2	0	0	0	0	0	2
(H)	WH—トヤ	1	0	0	0	0	0	1
(I)	—WH	10	0	0	0	0	0	10
(J)	—WH+ゾ	12	0	0	0	0	0	12
(K)	—WH+ゾヤ	2	1	0	0	0	0	3
(L)	WH	4	0	0	0	0	0	4
(M)	WH+ゾ	1	0	0	0	0	0	1
計		87	26	5	9	1	4	132
		113		14		5		

- ・疑問詞(を含む成分)を符号WH、助詞を片仮名で示す。

表3 〈伊曾保〉の肯否疑問文の形式

形式		会話文	地の文	心内文	小計	計
I	一や一連体形	1	2	2	5	18
	一や	1	0	0	1	
	一とや一連体形	2	7	0	9	
	一にや一連体形	1	0	0	1	
	一にや	0	2	0	2	
II	一終止形+や	20	1	2	23	26
	一やいなや	3	0	0	3	
III	一連体形／名詞句+か	11	0	1	12	12
計		39	12	5	56	

・「一連体形／名詞句+か」形式を「一か」と表すこともある。

疑問詞疑問文の基本形式は（A）疑問詞（を含む成分）を用い、文末を連体形で結ぶ「WH一」・（B）「疑問詞（を含む成分）+か」を用い、文末を連体形で結ぶ「WH+カ一」・（C）疑問詞（を含む成分）を用い、文末を「ぞ」で結ぶ「WH一ゾ」である。肯否疑問文の基本形式はI 助詞「や」を文中に用いる「一や一連体形」・II 助詞「や」を文末に用いる「一終止形+や」・III 助詞「か」を文末に用いる「一連体形／名詞句+か」である。^(註4)

〈伊曾保〉の疑問詞疑問文は132例、肯否疑問文は56例で、その合計は188例である。割合は疑問詞疑問文が70.2%、肯否疑問文が29.8%になる。一方、〈教訓〉の疑問詞疑問文は16例、肯否疑問文は9例で、その合計は25例であったので、割合は疑問詞疑問文が64.0%、肯否疑問文36.0%になる。割合を比べると、〈教訓〉は〈伊曾保〉よりも疑問詞疑問文が少なく、肯否疑問文が多い。

〈伊曾保〉の疑問詞疑問文でもっとも多い形式は（B）の「疑問詞（を含む成分）+か」を用い、文末を連体形で結ぶ形式（32例、24.2%）で、それに続くのは（C）の疑問詞（を含む成分）を用い、文末を「ぞ」で結ぶ形式（23例、17.4%）である。そして、肯否疑問文でもっとも多い形式はIIの助詞「や」を文末に用いる形式（23例、41.1%）である。一方、〈教訓〉の疑問詞疑問文でもっとも多い形式は（A）の疑問詞（を含む成分）を用い、文末を連体形で結ぶ形式（6例、37.5%）で、それに続くのは（E）の疑問詞（を含む成分）を用い、文末を「や」で結ぶ形式（4例、25.0%）である。そして、肯否疑問文でもっとも多い形式はIIIの助詞「か」を文末に用いる形式（6

例、66.7%)である。よく出現する形式を比べると、〈教訓〉と〈伊曾保〉の間に相違がある。疑問詞疑問文では文中の助詞「か」を使わない方向に、肯否疑問文では文末を助詞「や」から助詞「か」で結ぶ方向に変化している。

以上から次の事が指摘できる。

- a 疑問文の割合を比べると、〈教訓〉は〈伊曾保〉よりも疑問詞疑問文が少なく、肯否疑問文が多い。
- b よく出現する形式を比べると、〈教訓〉と〈伊曾保〉の間に相違がある。〈教訓〉は〈伊曾保〉よりも、疑問詞疑問文では文中の助詞「か」を使わない方向に、肯否疑問文では文末を助詞「や」から助詞「か」で結ぶ方向に変化している。

4 万治本『伊曾保物語』の対応部分との比較

4. 1 『教訓近道』の疑問詞疑問文

〈教訓〉〈万治本〉に共通する16話で〈万治本〉に見られる疑問詞疑問文は26例であり、次の形式をとっている。

- | | |
|------------|---------------|
| (A) WHー | 5例(会話文3・地の文2) |
| (B) WH+カー | 5例(会話文4・心内文1) |
| (C) WHーゾ | 5例(会話文5) |
| (D) WH+カーゾ | 4例(会話文4) |
| (E) WHーヤ | 1例(会話文1) |
| (F) WH+カーヤ | 3例(会話文2・地の文1) |
| (G) WHーゾヤ | 1例(会話文1) |
| (J) ーWH+ゾ | 2例(会話文2) |

〈教訓〉の16話には疑問詞疑問文が14例見られるので、〈万治本〉よりも〈教訓〉ではかなり減少している。また〈教訓〉は(A)(B)(C)(E)(J)に相当の5形式であるのに、〈万治本〉は上記の8形式であるので、形式も〈万治本〉よりも〈教訓〉で減少している。〈教訓〉の14例のうち〈万治本〉に対応する部分が存在するのは13例で、それらは〈万治本〉ですべて疑問詞疑問文になっている。なお、〈万治本〉の残りの1例は〈教訓〉で異文であったり、対応する部分がなかったりで比較ができない。

[〈教訓〉で(A)「WHー」形式のもの]

この形式は会話文に6例ある。次の例(3)のみ反語を表し、(4)(5)を含めて他は問いを表す。

(3) 〈教訓〉河童大きに怒つて、「何の金を汝にやるべき。(205-2)

〈万治〉龍、怒つて云く、「何の金銭をか、参らすべき。(135-2)

(4) 〈教訓〉鶴が一羽、飛び来たりて、「其元は、何故に苦しみ給ふ。」と聞きければ、狼は涙を落として、泣く泣く言ひけるは、(210-6)

〈万治〉鶴、この由を見て、「御辺は何を悲しみ給ふぞ。」といふ。狼、泣く泣く申しけるは、(92-6)

(5) 〈教訓〉狐、又人に向ひ、「どれ程締められし。」と言へば、「これ程なり。」と、縄にて締めるを、(205-8)

〈万治〉狐、人に申しけるは、「いか程か、締め付けらる(る)ぞ。」といふ程に、「これ程。」とて、締めければ、(135-9)

〈万治本〉の対応部分は「WH—」形式が1例、(3)のように「WH+カー」形式が2例、(4)の「WH—ゾ」形式が1例、(5)のように「WH+カーゾ」形式が2例である。

〈教訓〉では〈万治本〉の疑問形式から文中の助詞「か」、文末の助詞「ぞ」を除く方向で表現が選んである。

[〈教訓〉で(B)「WH+カー」・(C)「WH—ゾ」形式のもの]

(B)形式は会話文・心内文に各1例、(C)形式は会話文に2例ある。次の例(7)のみ問いを表し、(6)を含めて他は反語を表す。

(6) 〈教訓〉(狐が馬に)「…我等、先へ上がりしとて、いかでか我が力にて上がるべき。いつまでもゆるりと、そこに居給へ。」とて帰りぬ。(242-11)

〈万治〉(狐が野牛に)「…何としてかは、御辺を引上げ奉らんや。さらば。」とて帰りぬ。(156-2)

(7) 〈教訓〉その時、狼は悪心起りて、羊の傍へ歩みより、「汝は何故に我が飲む水を濁したるぞ。」と言ひかかれば、羊は答へて、(223-12)

〈万治〉狼、羊を見て、かの傍に歩み近付き、羊に申しけるは、「汝、何の故にか、我が飲む水を濁しけるぞ。」といふ。羊答へて云く、(86-1)

〈教訓〉で「WH+カー」形式の場合、〈万治本〉の対応部分は「WH+カー」形式が1例、(6)の「WH+カーヤ」形式が1例である。また、〈教訓〉で「WH—ゾ」形式の場合、〈万治本〉の対応部分は(7)の「WH+カーゾ」形式が1例、「WH—ゾヤ」形式が1例である。〈教訓〉では〈万治本〉の疑問形式から文末の助詞「や」、文中の助詞「か」を除く方向で表現が選んである。

[<教訓> で (E)「WHーや」形式のもの]

この形式は会話文に 3 例ある。例(8)をはじめとして、すべて問いを表す。

(8) <教訓> 蟻答へて言ふやう、「蟬殿には、春、夏の営みには、何事をなさるや。」
と言へば、(195-7)

<万治> 蟻、答へて云く、「御辺は、春秋の営みには、何事をか、し給ひけるぞ。」
といへば、蟬、答へて云く、(129-8)

<万治本> の対応部分は(8)の「WH+カーズ」形式が 1 例、「WHーズ」形式が 1 例、対応する部分がないのが 1 例である。<教訓> では <万治本> の疑問形式から文中の助詞「か」を除き、文末を助詞「ぞ」から「や」^(注5) に変える方向で表現が選んである。なお、<教訓> の (J)「ーWH+ズ」形式に対応する部分は <万治本> でも同じ形式である。

以上から次の事が指摘できる。

- a <教訓> の疑問詞疑問文は <万治本> よりもかなり減少している。また <教訓> の形式も <万治本> よりも減少している。
- b <教訓> では <万治本> の疑問形式から文中の助詞「か」、文末の助詞「や」「ぞ」を除く方向で表現が選んである。<教訓> と <万治本> の形式に違いが見られる。

4. 2 『教訓近道』の肯否疑問文

<教訓> <万治本> に共通する 16 話で <万治本> に見られる肯否疑問文は 11 例で、次の形式をとっている。

- | | | |
|-----|------------|-------------------|
| I | 一や一連体形 | 3 例 (会話文 2・地の文 1) |
| | 一にや | 1 例 (地の文 1) |
| II | 一終止形+や | 3 例 (会話文 2・地の文 1) |
| III | 一連体形/名詞句+か | 4 例 (会話文 4) |

<教訓> の 16 話には肯否疑問文が 8 例見られるので、<万治本> よりも <教訓> ではやや減少している。この 8 例のうち <万治本> に対応する部分のあるのは 7 例である。しかし、<万治本> でも対応する部分が肯否疑問文になっているのはわずか 1 例である。

(9) <教訓> 御身、わづかの得に誇りて、大きな損のあるを弁へずや。」と恥ぢしむれば、孔雀は一言半句もなく、(249-7)

<万治> 少しき徳に誇りて、大きな損をば弁へずや。」とぞ、恥を示しける。
(163-10)

〈教訓〉には例(9)のほかにもう1例「一終止形+や」形式があるが、〈万治本〉の対応部分は疑問文ではない。

(10) 〈教訓〉 寒くなれば、羽も腰も抜けて、飛び歩く事もならず、いと見苦しささまならずや。(217-7)

〈万治〉 秋深くなるに随いて、翼よ(は)り、腰抜けて、いと見苦しき、とぞ申し侍りき。(109-3)

〈教訓〉の「一か」形式が〈万治本〉で命令文になっているものが3例ある。

(11) 〈教訓〉 (蟬が)我にも少し分けて下さらぬか。」と言へば、蟻答へて言ふやう、(195-6)

〈万治〉 我に少しの餌食を賜び給へ。」と申しければ、蟻、答へて云く、(129-6)

(12) 〈教訓〉 御苦勞ながら、ちよつと此処まで下りては下されぬか。」と言へば、鶏答へて、(198-12)

〈万治〉 先づ此所へ降りさせ給へ。(119-7)

(13) 〈教訓〉 あの犬をもここへ呼んで、仲むつまじく遊ばふではござらぬか。」と言われ、^(ママ)
^(ママ)(204-1)

〈万治〉 そこに待ちて、犬と交り給へ。(119-14)

(11)(12)は〈教訓〉で肯否疑問文の形式をとりながら、相手に対しての依頼を表し、(13)は勧誘を表している。

〈教訓〉の「一か」形式が〈万治本〉で願望の表現になっているものがある。

(14) 〈教訓〉 しかし、この頃は、お声も殊の外よくなられたと承りましたが、なんと一声、鳴いて聞かせて下されぬか。(208-8)

〈万治〉 但し、この程世上に申せしは、『御声も事の外、能く渡らせ給ふ』など申してこそ候へ。あわれ、一節聞かまほしうこそ侍れ。(98-8)

(14)は〈教訓〉で肯否疑問文の形式をとりながら依頼を表している。

次の例は〈万治本〉に対応する部分が存在せず、「一か」形式が依頼を表すものである。

(15) 〈教訓〉 鶏答へて、「それは何より良き事なり。しかし、我等は少し此処に用もあれば、そこからお話下されぬか。」と言へば、狐は首を振り、(199-2)

なお、共通寓話における〈万治本〉の「一か」形式4例のうち、〈教訓〉に対応部分があるのは次の1例のみである。

(16) 〈万治〉 (狼が)狐に申しけるは、「魚の入りたるか、殊の外重くなりて、一足も引かれず。」といふ。狐申しけるは、「さん候。殊の外に魚の入りて見え候程に、(138-8)

〈教訓〉だんだんに重くなりて、今は一足も泳ぎ難く見ゆる時、狐、狼に向ひて、「さても沢山に魚の入りたれば、(228-7)

この例は〈万治本〉で会話文にあり、問いかげに使われているが、〈教訓〉では地の文に変わり、「一か」形式が使われていない。

〈万治本〉に対応する部分が有るかどうかにかかわらず、〈教訓〉の「一か」形式には依頼を表すものが4例ある。しかし、共通寓話における〈万治本〉の「一か」形式4例にも、〈伊曾保〉の「一か」形式全体にも依頼の表現はない。為永春水は〈万治本〉の命令や願望の表現を〈教訓〉で「一か」形式による依頼や勧誘の表現に変更した。ここに〈教訓〉と〈万治本〉の表現方法の大きな相違がある。

〈教訓〉の「一や一連体形」形式は〈万治本〉で心内文の感動表現になっている。

(17) 〈教訓〉一羽の鳩、木の上よりこれを見て、憐れにや思ひけん、木の枝を少し食ひ切つて、水の中へ落しければ、(237-2)

〈万治〉鳩、木末よりこれを見て、「哀れなる有様かな」と、木末を少し食ひ切りて、河の中に落しければ、(145-5)

以上から次の事が指摘できる。

- a 〈教訓〉の肯否疑問文は〈万治本〉よりもやや減少している。
- b 為永春水は〈万治本〉の命令や願望の表現を〈教訓〉で「一か」形式による依頼や勧誘の表現に変更した。ここに〈教訓〉と〈万治本〉の表現方法の大きな相違がある。

5 おわりに

イソップ寓話集を翻訳して江戸時代前期に刊行された『伊曾保物語』と、その一伝本である〈万治本〉を基に寓話を抄出して作成された『教訓近道』を比較することで、疑問表現の形式と用法を追究してきた。その結果、次のことが指摘できた。

『教訓近道』の疑問表現の概観]

- a 疑問詞疑問文の方が肯否疑問文よりも多く、全体の三分の二に相当する。
- b 疑問詞疑問文で多い形式は、(A)の疑問詞(を含む成分)を用い、文末を連体形で結ぶ形式である。
- c 肯否疑問文で多い形式は、Ⅲの文末助詞形式「一か」である。

『伊曾保物語』との比較]

- d 疑問文の割合を比べると、〈教訓〉は〈伊曾保〉よりも疑問詞疑問文が少なく、肯否疑問文が多い。

- e よく出現する形式を比べると、〈教訓〉と〈伊曾保〉の間に相違がある。〈教訓〉は〈伊曾保〉よりも、疑問詞疑問文では文中の助詞「か」を使わない方向に、肯否疑問文では文末を助詞「や」から助詞「か」で結ぶ方向に変化している。

[〈万治本〉の対応する部分との比較]

- f 〈教訓〉の疑問詞疑問文は〈万治本〉よりもかなり減少している。また〈教訓〉の形式も〈万治本〉よりも減少している。
- g 〈教訓〉の疑問詞疑問文は〈万治本〉の疑問形式から文中の助詞「か」、文末の助詞「や」「ぞ」を除く方向で表現が選んである。〈教訓〉と〈万治本〉の形式に違いが見られる。
- h 〈教訓〉の肯否疑問文は〈万治本〉よりもやや減少している。
- i 為永春水は〈万治本〉の命令や願望の表現を〈教訓〉で肯否疑問文の「一か」形式による依頼や勧誘の表現に変更した。ここに〈教訓〉と〈万治本〉の表現方法の大きな相違がある。

『教訓近道』の作品の規模は大きくないが、〈万治本〉の対応する部分と比較することで江戸時代における疑問表現の変遷の様相を見ることができる。

〈注 記〉

注1 渡部温に関しては、片桐芳雄(1983、1984、1985)「幕末明治の洋学者・渡部温(一郎)覚え書」(1)(2)(3)『愛知教育大学研究報告(教育科学)』第32輯、第33輯、第34輯)に詳しく書かれている。また、東洋文庫693『通俗伊蘇普物語』(平凡社、2001年)の谷川恵一による解説が参考になる。

注2 拙稿「古活字本『伊曾保物語』の疑問詞疑問文」(『解釈』第58巻 第11・12月号 669集、2012年)、「古活字本『伊曾保物語』の肯否疑問文」(『岐阜聖徳学園大学紀要』〈教育学部編〉第52集、2013年)を参照されたい。

注3 調査には次の文献を利用した。

〈教訓〉…武藤禎夫(1995)「翻刻『絵入教訓近道』一イソップの合巻本」(『共立女子短期大学文科紀要』38)、〈伊曾保〉…日本古典文学大系『仮名草子集』(岩波書店 1965年)所収「伊曾保物語」、〈万治本〉…『仮名草子集成』第3巻(東京堂出版、1982年)所収「伊曾保物語(万治二年板)」

引用の表記は原則として武藤禎夫校注『万治絵入本伊曾保物語』(岩波文庫、2000

年)により、その頁・行を示す。

注4 疑問表現の基本形式は小田勝(2007)『古代日本語文法』(おうふう)に掲示してある形式を採用した。

注5 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』(岩波書店)は、疑問詞(を含む成分)を用い、文末を「ぞ」で結ぶ形式が、疑問詞(を含む成分)を用い、文末を「ぢや」で結ぶ形式にとって代わられ、現代語で「WHーダ?」「一ハWHダ?」形式を基本とするものになったと述べる。〈教訓〉に「ぢや」「だ」で結ぶものはない。文末の「や」について、江戸時代末期の上方語に見られる助動詞とらず、助詞と判断しておく。